



校長だより

呉市立市阿賀小学校
安宗 誠

純粋な物差しで物事を捉える

人に手話を教えてもらい続けた**ゴリラ**が何と2000種以上の手話を理解したそうです。そして、飼育員と信頼関係のできたゴリラが飼育員に、自分が捕らえられたときのことを手話で次のように語ったそうです。「僕は群れで暮らしていたんだけど、おかあさんは密猟者に首を切られて殺されて、僕は手足を縛られて、棒にぶら下げられて連れてこられたんだ。」と。

シジュウカラ。スズメサイズの街路樹などでも見られる野鳥です。鳴き声の「ジャージャー」はヘビがいることを知らせているらしく、そのとき、他のシジュウカラは一斉に木の上から下の地面を見るそうです。「ジャージャー」に「ジャジャジャ」が加わると、ヘビが近づいている緊迫した状況だそうです。「ピーツピ・チチチチ」は、「ピーツピ」（警戒しろ）＋「チチチチ」（集まれ）なんだそうです。しかし、「チチチチ」（集まれ）を先に言う実験をしたところ、それでは集まって来ないそうです。ということは、シジュウカラの鳴き声には、意味があるだけでなく、文法もあるということなんだそうです。また、シジュウカラは、他の天敵ではない鳥とも一緒に生活するそうです。それを「混群」というそうです。その中で種類のちがうお互いの鳥の鳴き声がある程度理解しているそうです。混群する他の大きな鳥にえさをとられないように「タカが来たぞ!」と、だまし鳴きをして、そのすきにえさを手に入れることもするそうです。

ホシガラスや**コガラ**といった野鳥。冬の貯えのために、えさの種子などを木の股などに隠しておくそうです。その隠し場所はなんと数千カ所。その隠し場所を全部覚えているそうです。

ミツバチ。真っ暗な巣の中で、腹部を震動させて蜜をもつ花の位置を仲間知らせるんだそうです。

そういったことが、最近読んだ「動物たちは何をしゃべっているのか?」（集英社）に書かれていました。

人間基準・自分基準で物事を捉えようとする、人間より動物はとか、自分よりあの人はといった捉え方をしてしまいがちですが、人間が思っているより、自分が思っているより、はるかにハイレベルで、その生き物にとっては、その者にとっては、豊かな生活を送っているのかもしれない。純粋な物差し、澄んだ心で物事を捉えることの大切さを改めて認識したところです。



シジュウカラ